

農業に企業目線で新しい事業スタイルを見出す (株式会社 大山キララファーム)

<法人の概要>

所在地：鳥取県米子市

設立：平成28年9月

資本金：3,000万円

売上高：3,455万円（令和6年 農業売上100%）

役員：2名（うち農作業従事者1名）

従業員数：4名（うち農業従事者4名）

経営面積：3.4ha（うち所有面積1ha、借入面積2.4ha）

営農作物：日本梨2.5ha 柿0.9ha



梨の圃場（V字トレリス樹形の導入）



キララファームの皆さん（圃場にて）

<農業参入に至った経緯・動機>

山陰地方で新規事業（親会社は、株式会社松本油店（鳥取県米子市））を検討していた中で、人口減少が進んだ当地方で何が出来るか（※1）、資源として山と海と川と農地が豊富にあるので、これを活用する事で事業目的を特定した。同時に参入失敗事例を分析（※2）し、参考とした。

農業を通じて新しい事業スタイルを企業目線でつくり、カーボンニュートラル社会への適応方法を同時に模索するため、作物を鳥取県の特産物（※3）である梨と柿の果樹（※4）に決定した。

そしてJAの梨・柿生産部に加入し、生産から流通までの情報収集、農業の取引習慣の学習を行った。（※5）

＜農業参入を決めてから営農開始までの状況＞

代表が栽培担当を求人情報サイトで募集して、現在の農場長（役員）を採用（※6）した。採用後に農場長は、梨栽培の親方の下で1年間修行（※7）した。農地の手配については、基本的に農地中間管理機構（※8）を通じて行った。

＜営農開始から現在までの状況＞

農場長は、栽培に専従（※9）し、代表が栽培以外の農業の運営・管理を行う体制としている。

地域で法人の農業参入は初めてだったので、当初、地域に戸惑いがあることを感じていた。現在は、同じ時間を重ねたことで薄らいできていると思う。

＜特徴的な取り組み＞

ロボット・大型機械導入を前提とした畑づくり、V字トレリス樹形を採用した。（※10）

＜今後の経営方向＞

異常気象に適応した品種の採用と土壌改良を行う。

第2、第3のキララファームを作りたい。（※11）

財務体質の強化、自己資本率40%以上を目指す。

青梨反収日本一を目指す。（※12）

＜今後の農業参入企業へのアドバイス＞

作物毎に既存の農業法人と相談連携すると良い。JAの生産部に加入し仲間をつくる事です。（※13）

！深掘り（詳しく訊いてみました）！

- ※１：地方に貢献できる事業として、利益の追求だけでなく、永続的に事業を続けることを考えました。
- ※２：失敗事例では、①品質が不揃いのため、②ロット（同程度の品質の生産物）が揃わず、③販路の確保ができなかったことが見受けられました。（小売り側として、ロットが揃わないと販売計画が立てづらい。値切られたりする。）
- ※３：特産物は、その地域を代表する物品であるため、地域が力を入れており、①各種補助（補助金や研修等）が充実していることや、②生産技術が確立されており、品質を揃えやすく、ロットの確保が容易と考え決定しました。（ロットが揃うと、小売り側と対等な立場で交渉がしやすい。安定した値段で取引できる。）また、ＪＡ鳥取から梨の栽培方法を記した月刊誌「因伯ノ果樹」が刊行されており、充実した指導書があることも要因です。
- ※４：果樹であれば、成木になれば、収量（売上）が安定する。そうすると経営の安定化につながりやすいと考えました。
- ※５：親会社の松本油店は、商工業の会社なので、農業の流通の仕組みについてはわかりませんでした。そのため、選果場（ＪＡ）を通じて勉強しました。資材面でのコストカットは難しいと感じ、単位面積あたりの収量をあげることが大切だと考えました。
- ※６：農業経験はありませんでしたが、農業へ情熱をもっている若者でしたので採用しました。
- ※７：技術が身についたことに加えて、人との繋がり（分からないことが聞ける環境）ができました。
- ※８：個人から手配すると個別に契約手続きが必要となり、期間も３年・５年となりがちです。設備投資とその費用の回収を考えると梨の場合、２０年は必要と考えています。その点、機構であれば、一括で契約手続きが済み、２０年の長期契約を結ぶことができました。
- ※９：代表の采配で、生産意欲の維持のために、栽培に情熱を傾けてもらっています。
- ※１０：生産力の向上を目指しています。防除や収穫を想定しており、導入することで、同じ人数でより大きな面積を営農することができるようになると考えています。そのため、機械が導入（作業）しやすい畑づくりとしてＶ字トレリス樹形※※を採用しました。現在は、まだ若木ですが、９０ａ栽培しています。
※※ 参照：農林水産省ＨＰ（早期成園化と省力化を実現するニホン梨のジョイントＶ字トレリス樹形）
https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kihyo03/gityo/new_tech_cultivar/2022/2022seika-09.html
- ※１１：農業者が減少する中で、今後も地域の生産量が維持できるかを危惧しています。生産量を維持するためにも、当社のような農業法人を作っていく必要性を感じています。ただ、当社の生産体制が確立できる（木が成木化する）には後４年位必要かなと思っています。
- ※１２：反収向上のためにも、Ｖ字トレリス樹形を採用しています。
- ※１３：やはり、どこに相談をして、何に注意して、誰とコミュニケーションを取ったらいのか。そのことから学ぶことが大切だと考えています。また、ＪＡの生産部に参加することで、仲間づくり・友達づくりをすることも大切です。新人には皆さん優しいですよ。